

五等分の不幸と幸運

ジャンボカニカマ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オリ主が風太郎と一緒に家庭教師をする物語です

小説書くのは初めてなのでお手柔らかに…

事件	第1話	第2話	第3話	第4話	赤い五つ子	不幸発動!?
	44	39	32	24	13	1

目

次

第1話

「焼肉定食焼肉抜きで」

相変わらず質素な昼飯を食べている変な頭の

こいつは上杉風太郎

俺の小学校からの幼馴染だ

質素と言っている俺も

「おろしうどん」

この食堂で1番安いメニューだ

とてもこれで足りないが自分の懐事情を

考えると仕方ない

「先 席取つといてくれ」

「ああ。わかった」

おろしうどんを受け取りいつもの席へ向かうと…

「私が先に取りました

どいてください」

「やだね

ここは俺と連れがいつも座つてる席だ

お前がどけ

制服が違う他校らしき女子と口論していた

「おいおい

少しごらい融通聞かせろ」

「はあ!?

ここ譲つたら逆にどこに座れって言うんだよ」

食堂は昼休みほぼ全校生徒が来るので遅く来てしまってほんの少し空きがあるが、全部埋まつていて座る席がない

幼馴染の言い分もわかるが…

「じゃあ俺立つて食うから

お前とそこの…」

「中野五月です」

「…中野さんと座つて食え」

「なんでこいつと相席なんだよ！」

すると少し躊躇つたが中野さんの方は座つてしまつた

「お前が女子生徒と昼飯…」

くくく…どんな噂立つだらうなあ…」

「蒼介てめえ！」

と言つてゐる風太郎も座つてしまつた
すると案の定声が聞こえてきた

「え…上杉君が女子と一緒に…」

「あいつ…あんな美少女と昼飯なんて…」

俺は笑いを堪えるのに必死だつた

「蒼介お前…覚悟しとけよ…」

向かいの席の中野さんも顔が赤くなつて
下を向いているのを風太郎も気づいたのか

「…まあいいよ

勝手に食え」

「…いただきます」

風太郎から許可を貰うと箸を取り食べ始めた
すると風太郎の顔が驚きで目を見張つていた
だいたいこいつが考へてる事はこんな所だらう

「500円のうどんに

100円と150円のえび天とさつまいも天
さらに250円のプリン…

昼食に1000円以上なんてセレブかよ」

「勝手に俺の思考読み取るなよ！」

そんな会話をしているのに中野さんは顔色ひとつ変えずに美味しそうに食べてゐた

すると風太郎の方を見て
「食べながら勉強ですか…
横着ですよ」

「何？」

ながら見してゐた二宮金次郎は称えられるのに俺は怒られるの

？」

「状況が違います！」

「風太郎よ…」

俺もそれはなんの言い訳にもならんと思うぞ

「うつせえ！」

すると風太郎側の机の上に乗っていた紙を中野さんが取ると
「テスト勉強しながらですか…」

よっぽど追い込まれていてるのですね…」

と哀れみの目を向けて来た

「何点だつたんですか？」

と紙を開くと

「おい！」

勝手に見るな！」

「上杉風太郎君…」

点数は…100点!?

「あー

めっちゃ恥ずかしい！」

「わざと見せましたね!?」

「お前…そこまで腐っているとは…」

「うつせえ！」

そんなこと言うお前も…」

「おい勝手にどんな!」

「中村蒼介

点数96点!?

「あー

風太郎程じやないけど恥ずかしい！」

俺たちの点数を聞いてか中野さんは頬を膨らませていた

「2人ともそんなに頭がいいのですか…

…いい事思いつきました！」

あながち言わることとその後は予想がついた

「勉強…

教えてくださいよ」

「ゞちそこまででした」

ほらな予想通り

「ええ!」

食べるの早い!

それだけでいいんですか?

私の少しあげましょうか?」

…はつ!

「早まるな風太郎!」

と思い口を抑えに行つたが…

「あんたが食いすぎなんだよ

太るぞ」

ああ…

言つちやつた…

「太つ…!」

こんなにデリカシーのない人は初めてです!

もう知りません!」

「お前それは酷いぞ」

「いいだろどうせこれ以上話す事もない相手なんだから」と風太郎の携帯がなり足早に教室に帰つていった

「…すまんな

あいつも悪気はないんだ

ただ言いたいことはすぐ言うやつで」

「…あんな人と一緒にいる人とは思えませんが…」

「じゃ俺から謝れって言つておくから

それじや」

その場をさり教室に戻ると風太郎が来て

「蒼介…俺の借金問題解決できるかもしれない…」

仕事が貰えたんだ」

「はあ!」

確かにお前地道にバイトして少しづつ親父さんと一緒に返済して
るけども

大丈夫かそれ：

まあ大丈夫か人の腎臓って片方なくなつても

大丈夫らしいからな

「お前もらいはと同じこと言うんじゃねえ！」

「で？」

どんな仕事なんだ？」

するとどんどん幼馴染の顔は青くなつていき
絞り出すような声で言つた

「家庭教師：」

しかも生徒の名前は…中野…」

あーお前やつちまつたな

「…今からでも間に合う謝つてこい」

すると先生が入つてきて

風太郎は後でといい席に着いた

「今日から2人転校生」がうちのクラスに入つてくる」

は？2人？

中野はひとりじや…

顔が青くなる俺と一緒に風太郎も青くなつていた

「じゃ入つてきていいぞ」

ガラガラ…

「中野五月です

よろしくお願ひします」

「中野一乃よ

よろしく

…中野が二人？

俺たちと同様にクラスのやつらもザワザワしていた

「じゃ中野達は中村の後ろと前な」

…なんで俺の後ろと前ご丁寧に空いてるんだよ

中野さん（五月）が席に座る時に風太郎は

謝ろうとしたみたいだが無視されたようだ

：後悔先に立たずとはこのことだな

「よろしく」

普通に挨拶をすると

「中村君と同じクラスでしたか

色々教えてください

：改めてよろしくお願ひします」

「あら

五月と知り合いなのね

私は五月と姉妹の二乃よ

よろしく」

なるほど姉妹か

だいたいそんなところだろうと思つていたが
翌日の昼休み

いつも通り食堂へ行きいつもの物を頼み
いつも通りいつもの席へ向かおうとしたが：
「まさか今謝るつもりか？」

「そうだけど何か問題あるか？」

：問題は無いが今中野さん（五月）は…

「なつ…！」

あいつもう友達と食つてやがる…」

「確かに早いな」

すると中野さん（五月）がこつちに気づいたのか
こつちに来て

「すいません

席はもう埋まっています」

勝ち誇ったような顔で言つてきた

「くそっ」

足早に俺たちはその場を離れようとすると…
「いいの？それで

五月ちゃんが狙いでしょ

ショートカットのやけに中野さん（五月）と顔が似ている女子に言
われた

「狙いも何も

謝りたいだけだ」

「もう

照れ隠しして

あつ私が五月ちゃん呼んできてあげるよ
すると幼馴染は腕を掴み

「いい

自分のことは自分でどうにかする

勝手なことするな」

…こいつの謎の男気

するとショートカットは風太郎の背中を思いつきり叩き

「ガリ勉そなのに男氣あるじやん！

困つたらこの一花お姉さんに相談するんだぞ」

相談も何も同じ学年だろ多分

ショートカットはその場をさり俺たちはいつもの席に向かつた
風太郎が顔を暗くし下を向きながら質素な飯を食つていると…

「上杉さーん

上杉さーん！」

何してんだあのうさ耳

風太郎の顔を覗き込み名前を呼んでいる

あれでなんで気づかないんだ風太郎はと思っていると

「うわっ」

「ははっ

やつと気づいてくれた

さすがに気づいたのかみつともない声を幼馴染は出した

「さて問題です

あなたの回答はどつちでしょか！」

こつちといい自分の回答を取ると

「正解です！」

正解したご褒美にこつちの0点の回答もあげちゃいます！」

「いや

そつちはいらないんだが」

「風太郎

俺0点の回答初めて見たんだが」

「安心しろ

俺もだ」

「わははは！

そんな褒めなくていいですよー！」

「褒めてねえよ！」

2人被つて突っ込んでしまった

風太郎がめんどくさいと思つたのか足早にその場を去つたので

「じゃありがとな」

といい俺も去つた

だが：

「いつまでついてくるんだ！」

そう彼女は更衣室までもついてきたのだ

すると

「人になにかしてもらつたらありがとうって言うんですよ！天才なのにそんなことも分からないんですか？」

すると風太郎は0点の回答をうさ耳に押し付け

「たまたま拾つた

これで貸し借りなしだ」と言つた

「お前どれだけ言いたくないんだよ」

するとうさ耳は

「そうですか！」

「ありがとうございます！」

「言つちやつたよこの子

放課後

「…風太郎

このパネルに顔をはめる理由は？」

「変装？だ

「これで大丈夫だろう」

「…こいつ時々馬鹿なのなんやと？」

俺たちは中野さん（五月）に謝るため休み時間近づこうとしたが他のクラスメイトの壁があり近づけず謝るタイミングがなかった
：ていうか避けられてた気が…
それで結局放課後謝ることになつたのだが…

「何故3人いる」

そう中野さん（五月）の周りには2人いるのだ
姉妹の中野さん（二乃）はわかるとして

「友達作るの早過ぎないか？」

「あいつ意外とコミュ力高いのか

「そんなもんだろう女子は」

「あんた何個食うつもりよ肉まん」

「まだ2個目ですけど」

「だからこんなにお腹にお肉が着くのよ！」

「二乃！」

「やめてください…！」

「なんと眼福な光景だろうか

手の感覚変わりたいくらいだ

「蒼介

「それはやばいぞ」

「ナチュラルに思考読んでくんna」

「そういう趣味なの？」

「終わつた…」

「友達の1人に気づかれた…」

「そういう趣味なんだ

ほつといてくれ」

「え？」

するとヘッドホンをつけている彼女はスマホを取りだし：

「自然と警察に通報しようとするのやめてくれる？」

そう言い俺たちは足早にその場を去ったふりをした

なんでふりかって？

見失つたらそれこそ風太郎が終わりだろ

「あつ

あいつら動いたぞ

追跡するぞ」

「何？

あんた達ストーカー？

…ていうかなんで

あんたまでいるのよ」

「どーも！」

風太郎がヘッドホンを睨むと
「警察には言つてない」

と

とんだ屁理屈だな

「ストーカーって失礼ですね

ここ僕たちの家ですけど？」

…それでいけるなら苦労は

「嘘！」

「ごめんなさい！」

純粹なのを騙すのは心が痛いな

「焼肉定食焼肉抜き…」

「お金ないの？」

あのヘッドホン…：

「行くぞ蒼介！」

「あつ！」

待ちなさい！

警備員さーん！」

たまたま人が通りオートロックが空いたのが幸いだつた
エレベーターに乗り込もうとしたが
閉まつてしまつた

「こつちだ蒼介！」

お前馬鹿だろ

30階に住んでるつてお前自分で言つてたろ
と思いつつも階段を息を切らしつつ上り
登りきると…

「中村君！」

しかもなんで…」

「はあはあ…」

すまなかつた！」

風太郎が謝つたが

「許しません！」

それより今から家庭教師の人が来るので早くお引き取りください

！」

「その家庭教師…」

俺…」

「え？」

嘘…

こんな人な私たち5人の家庭教師だなんて…」

ん？5人？

2人じやないのか？

さすがに気になり

「おい5人つてどういうこと…」

すると風太郎が言葉を遮るように

「俺の方が嫌だね！」

だが断れない理由がある！」

「俺がお前らのパートナーだ！」

すると風太郎と5人というおかしい人数に気づいたのか顔が青くなってきた

するとエレベーターが来て

「あれ？」

ガリ勉くんじやーん！」

「あーー！」

こいつがストーカーよ！」

「えー!?

上杉さんストーカーだったんですか？」

「四葉

早とちりしそぎ」

嘘だろ…まさか…

風太郎も同じことを考えていそうだったが

さすがに信じられず

「友達とシェアハウスか…仲良いな…」

頼むそうであつてくれ

「いいえ違います

私たちは5つ子です」

どうだつたでしようか？

少し抜けているストーリーや

間違っている言葉があるかもしれません

そこは許してくれ…

オリ主のヒロインは予想着いた人もいるでしようか

2人に絞れた人が大多数でしよう

これからよろしくお願ひします

第2話

「お兄ちゃん今頃家庭教師がんばってるかなー」

風太郎の妹、「上杉らいは」が料理を作りながら独り言を呟いていた

「今日は奮発しておかずに

卵焼きもつくつちやお！」

コンコン

台所の角で卵を割り、ボウルに出すと

「わあ」

綺麗に5個の黄身がでてきた。

一方

中野家ベランダ

〃

「五つ子!？」

ゴル○13顔負けの渋い顔をし、幼馴染は大声をあげていた
「本当だつたのかよ……」

さすがの俺もゴル（以下同文）をし、呆れてしまつた
何度も分からぬがもう一度風太郎は問いただした

「な……中野さん……娘さん達が五つ子

というのは、本当なんですか？」

俺たちの願いを断ち切るように無慈悲な
言葉が携帯から放たれた

「ああ。彼女たちは正真正銘の一卵性の
5つ子だ。君には5人を卒業まで導いて
やつて欲しい。勿論報酬は5人分払おう。」
勉強に関しては自信しかないガリ勉風太郎も
さすがの内容に……

「そ……それはちょっと自信ないかなー……
とか言って」

言い忘れていたが（誰にやねん）電話の主は中野家のお父さんだ

こんなに怖い声色の人つているんだな…

「そうかい。君のお父さんには押し切られてしまったが、仕方ない。残念だがこの話は

なかつたこと「自信がみなぎつてきました！」

まずいと気づいたのか風太郎は被せるように

取り繕いの嘘を言つた。俺は電話の主に聞こえぬように

「取り返しのつかない嘘はあんまりつくなよ」

一応忠告はしておいたからな

それなのにこいつは…

「すう…娘さん全員を無事卒業させて見せます!!!」

この馬鹿…たしかにこいつの事情も事情だが期待しているよ。ところで娘たちは

そこにいるのかい？」

そう言われてリビングへ俺たちが戻ると風太郎も含め俺は青ざめていた

そこに追いか打ちをかけるように

「どうかしたかい？」

まさか1人もいなとは…どれだけ勉強嫌いなんだ。

「ま 全く問題ありません。H A H A H A

おいおい押すんじゃないよ。全く困った生徒達だ！」

「ピツ」

幻覚を見ているのか風太郎…可哀想に…と風太郎に哀れみの目を向けていると

案の定睨まれた

「可哀想に…」

「うつせえ！」

はあ…あいつら…一体どこに…」

風太郎が思案していると1人やつてきた

「おい。うさ耳が来たぞ」

「うさ耳とは心外ですね！」

私には四葉というしつかりした名「わかつた
わかつた…すまん四葉…さん？」

「四葉でいいですよ」

「そうか」

ところでなんでこいつは残つて…

「ああ！　言おうとしたこと忘れてました！」

みんな自分の部屋に戻つたみたいですよ？」

ウツソだろ。はなからあいつら授業受ける気
ないじやねえか

「四葉…だつけ…0点の」

「えへへ」

「さつき」いつの名前について話してたじやねえか。聞いとけよ」

「こいつここまで人の話聞かないか：

「お父さんは話せましたか？」

「ああ。お前らが本当に…」

「どうした？風太郎」

話を途中で止めたので疑問に思い聞いたが
「…眉間にシワを寄せてみてくれ」

そういう事か

「？」

「」

「うですか？」

四葉がやつて見せた顔は五月の食堂での顔に似ていた。本当に似
てるな」といつら

「ていうがなんで四葉は逃げないんだ？」

「し　心外です！上杉さんと…」「中村　　中村蒼介だ「中村さんの
授業を受けるためにきまつてるじゃないですか」

「…」

…あのヘッドホンの姉妹か？本当に

「ていうか…なんで俺まで勉強教えるつて
なつてるんだ？」

俺がいると…

「まあ良いじゃねえか

これも成り行きだ」

はあここまで来たら今日は付き合つてやるよ

「わかつたよ」

「えーっと…いいですか？」

私は怖い先生がくるかとおもつて嫌だつたん

ですが、同級生の上杉さんとなら楽しめそうです！」

なんていい子なんだ…と感心していると

「四葉。抱きしめていいか？」

「幼馴染よ…それはさすがにキモイぞ」

「さー。他のみんなを呼びに行きましょー」

幼馴染のキモイ発言によく耐えたな…

2階のそれぞれの部屋があるところに行き

(マンションなのに2階があるのもおかしい話だが)

「手前から

五月

私

三玖

二乃

そして一花の順ですね

ご丁寧に1人ずつの部屋があるとは…金持ち

つて怖い…

「5人集めるところから始めるとはな…」

それな。本当に

「大丈夫ですって。クラスが一緒なら知つてると思いますが、五月は
すごく真面目な子です。余程のことがない限り協力してくれますよ
！」

「そうだといいんだが…」

風太郎と五月の間にはあれがあるからな…

風太郎が五月の部屋のドアをノックすると

すぐ出てきた。だが

「嫌です」

「あれー」

まあそうなるだろうな。ここは俺からも
「五月。こいつを許してやつてくれないか?

微塵もこいつに悪気はなかつたんだ」

「中村君に教えて貰えるならともかくあなたからは教えは一切こいま
せん」

あちやー

「そもそも何故同級生のあなたなのですか?

この町にはまともな家庭教師は1人もいないのでしょうか」

「…」もつともです…」

これは反論できねえな。だが風太郎は…

「なんだよ。昨日は勉強教えて欲しいって言つてたじやん」

さすがというか馬鹿というか風太郎は…

「気の迷いです。忘れて下さい。

バタン」

「…」

さすがの風太郎も心にダメージか:

そこを四葉がフオローしようとした

「あはは。5人いれば1人くらいこうなりますよ」

だが風太郎の心には響かなかつたようだ

「次行きましょう

風太郎と俺の手を引つ張り三玖の部屋の前に連れてきた

「三玖は私たちの中で1番頭がいいんです

上杉さんと氣があうんじやないかなー」

嫌な予感しかしない

「嫌 なんで同級生のあなたなの?この町

にはまともな家「わかつた!さつきも聞いたそれ!」

ほらな。てか:

「なんで正座?しかも俺と四葉まで…」

「何となく文句はフータローに言つて」

「……次行くぞ風太郎」

四葉について行きその場を後にする

二乃は人付き合いがとても上手なんです。沢山お友達がいるの

「これまた嫌な予感しかしないんだが」

「大丈夫。俺もだ」

二六〇 部屋

一部屋にもいないつてどういうこと!?」

「うつそだろ。予想の斜め上行きやがった」
また三枚や五枚のよう、一疋詰やれる

思つたが…

「自信なくなつてきた…」

最後の希望
あるにはあるが…

「大丈夫です！まだ一花かのこります！」

卷之三

「何その間!?」

怖すぎる…

「驚かないでくださいね？」

といい四葉が部屋のドアを開けると…
とても綺麗な部屋…ではなく

ヨチヤア

「ここには人た住んでるのな？」

一ココココで聞こえてきそな程の汚さ

だな
…

とても汚部屋が広がつていた

足の踏み場もろくになく、1歩踏み出したら足を怪我してしまいうだ

「人の部屋を未開の地扱いして欲しくないなあ」

なんだ!? なにか奥で動いてるぞ!

「ふあくおはよ まだ帰つてなかつたんだね」

そこには欠伸をして眠そうな一花がいた

「もー、この前片付けたばかりなのに…」

さすがの四葉も呆れていた

「足の踏み場もねえな」

「床あんのかこれ」

「まさかフーダローが私たちの先生とはね」

それで五月ちゃんを見てた訳だ」

「いいから 取り敢えず居間に戻るぞ」

といい風太郎が布団を引っ張ると

「あーザダメダメ 服着てないから照れる」

「o h……」

「なんでだよ!」

さすが風太郎も動搖を隠しきれないようだ

かくいう俺もだが

「ほら 私つて寝る時、基本裸じやん?」

あ。ショーツは穿いてるから安心して」

「そういう問題じゃ」

「あれー脱いだ服どこだー?」

四葉 そこら辺にある服適当にちようだい

服に無頓着なのがめんどくさいだけなのか:

「はあ」

⋮ こいつとは今日よく言葉が被るな

「お前なあ少しは片付けるよ…」の机なんて

最後に勉強したのはいつのことやら」

風太郎が一花の机らしきものを見て文句を言つた(汚すぎてはつきりと区別がつかない)

「もー勉強勉強つて せつかく同級生の
女の子の部屋に来たのに、それで、いいの?」

〔 〕

危ねえまじまじと見るとこなた二だ…

三致

「フリタコリ」と観人

「？」

勉強なら喜んでだか…

「私の体操服が無くなつたの、赤のシャーリー

「ヤツのまではあつたの。フータローと

芥介が来る前はね……

「服なんてどうでもいいって言つてたのに…」

うわあ…」

「濡れ衣だ！お前一緒にいただろ！」

三一

「クッキー作りすぎちゃった。食べる?」

「二刀はそれと云ひや。」

俺と四葉は気づいたようだ二乃の来ている服に

「あのジャージつて…」

リビング

「よし。これで4人だ。五月はいないが始めてしまおう。まずは実力を測るためにも小テストをしよう！」

「「「「いたきまーす！」」」

「美味しーこれなに味?」

「なんで私のジャージ着てたの?」

「えー? だつて料理で汚れたら嫌じやん」

「今すぐ脱いで」

「ちよ! やめて!」

「こりやあ前途多難だな…風太郎…」

お菓子を食べて女子会が始まりやがった
これはダメだな。こいつら余つ程だ

「上杉さん。ご心配なく! 私はもう

始めてます!」

「よーし。名前しかかけてないがいいぞ!」

「落ち着け風太郎」

どうしようかこれは

「クッキー嫌い?」

二乃か。俺はいいとして風太郎に話しかけるのはなにか裏あります

うだな

「いやそういう気分じゃ…」

「警戒しなくてもクッキーに毒なんて盛つてないから。食べててくれた
ら勉强してもいいよ

ほら中村も」

やめといた方がいいな

「いや俺はいい」

舌打ちされた気がしたがまあいいだろう

風太郎はおそらく…

「うわつもりもり減つてる!

そんなに美味しい?」

「あ

ああ…美味しいな」

「嬉しいなー

あ。そだ。パパとどんな約束したの?」

おつと…そこに来るか

「特に何も…」

クツキーを飲み込んでから言った

「うつそー。君つてそんなことするキヤラ
じゃないっしょ」

「ぶつちやけ家庭教師なんていらないんだよねー…」

「こいつ…やばい

「なんてね。はいお水」

二乃からグラスに入った水を差し出された
勿論俺は回避

「お…おう…サンキュー」

水を全部風太郎が飲み終わると二乃が立ち上がり

「ばいばーい」

「んあ？」

バタン

ほらな思つた通り

「上杉さん!」

ほかの姉妹も心配したが

「勉強のしすぎで寝てしまつたんじゃない？」

「これじや家庭教師は出来ないわね

「あんたも寝ればよかつたのに
まあいいわこいつ担いで帰つ」

「何飲ませた?」

流石に聞いておかないとな

まだ現状を理解していないようだな
「何飲ませた?」

もう一度ドスをきかせた低い声で聞いた

さすがにあいてが本気で怒つていると気づいたようだ
「な。何よ！何飲ませたつていいでしょ!?」
はあそこまでバカなのがこいつ

「何飲ませたつて聞いてんだよ」

「ちょっと蒼介君落ち着いて…」

「黙つてろ」

さすがにほかの姉妹も黙つた

この雰囲気に気づいたのか五月が「何事ですか!?」

と降りてきた

「落ち着いてください！」

と静止に入られたが

「どけ」

の一言で怯えてそこをどいた

もう一度聞こう

「何飲ませた?」

「す…睡眠薬よ!すぐ目覚めるわ!」

「あつそ。じゃ帰るわ」

風太郎を抱き帰ろうとすると五月が

「わっ私がタクシーで送つていきます!」

はあここで余計な気遣いはいらないんだがな

まあここはお言葉に甘えよう

「頼むわ」

とだけいい俺はエレベーターで五月と共に下に降りた

赤い五つ子

それからと、いうものの、五月の善意に甘え俺は風太郎を担ぎタクシーで送つてもらつたが

タクシーの中

— — — — —

「本当にすみません…なんと言つたらいいのか分かりません…」

五月はこの調子で何回も車の中で謝っていた

「あんたに謝られても意味が無い。俺に謝つてもね。風太郎に謝りな

九

三

そこまで風太郎が嫌いなのか、風太郎に謝れという度にたじろいでいる。そのやり取りを何回も繰り返してゐる間に風太郎の家に着いた。

俺は風太郎のトレードマークの髪の毛の触覚？！

のようなものを引つ張り無理やり起こした。

ふがつ！？：いてててて！！何すんだ蒼介！」

効果が短い睡眠薬で良かつた。さもないとまた担いでタクシーか

「馬鹿。起こしてやつてんだよ。ほら着いたぞ。さつさと降りろー

「えつ？ええ！タツタタタクシー！？」

かかか金なんて持つてねえぞ！蒼介お前持つてんのかよ！」

「カードで」

と支払いをしてくれた。そこはありがたいのだからこいつに謝らな
い事には俺もスッキリしない

「おい。五月、わかつてるよな？俺に謝るくらいならこいつに謝れ」
「おい、なんで俺家に帰つて「ちよつと静かにしてろ」

五月は絞り出すような声で

「…………すみませんでした」

「えただけマシか。二乃にも謝つて貰えたらなあ……そこは妥協か

「なあ蒼介。いい加減説明してくれ」

「ああ。俺はこれからバイトだから五月に説明して貰え」とい俺はタクシーを降りた

「ちよつ・待て」

風太郎が五月に説明してもらうのは間が悪いと俺を引き止めるが俺はそろそろバイトなので小走りでその場を去ろうとした。だが、そこに……

「あ やっぱりお兄ちゃんだ」

ぴよこつと風太郎の妹、上杉らいはが兄の後ろから顔を出した

「あの人つてもしかして！」

「な なんでもない人だ。帰るぞ！」

もちろん五月は妹のことを知らないのできょとんとしていた。

「嘘！あの人人が生徒さんでしょ」

「良かつたらウチで、ご飯食べていきませんか？」

「え！」

まあ そういうだらうな。風太郎がごまかそうとしたが五月はらいはちゃんの可愛いスマイルに負け食べていくようだ。さて、巻き込まれる前に帰る

「逃がさねえぞ！」

腕を掴まれた

「離せええええええ！」

結局引きずり込まれた。気ますすぎるだろ

風太郎と五月の間も俺と中野家の間も

「まさか風太郎が女の子を連れてくる日がくるとはな!!ガハハハ!!」

この声がでかい人は風太郎の親父さん

独り身になつてから助けて貰つてる人だ

「蒼介も久しぶりだなあ！」

「お世話になつてます。親父さん」

「お？この牛乳、消費期限が1週間前じゃねーか」

おつとまさかな

「危うく飲めなくなるところだつたぜ」

なんの躊躇いもなく親父さんは牛乳を飲み干した。

「逆にどれだけ過ぎたら飲めないんですか……」

それで腹を壊してない親父さんがすごい

「親父……」

と、風太郎もお客様がいるのにと、呆れていた

「もうすぐできるからねー」

と言われたが待つくらいなら俺はバイトに行きたいのだが……

「行かせねえからな？」

……逃げられないようだ

「お兄ちゃんが予定より早く帰つてきて

間に合わなかつたよ」

そりやか、まだ事情知らないんだつたな

何でこいつが早く帰つてこさせられたか

「家庭教師ちゃんとやつてきた？」

「「!!」」

説明せざるを得ないか……とどう言うか考えていると

「その件についてですご」「もちろんバツチグーよ!!」

あら、隠す方向性なの？風太郎さん

まあそうせざるをえないか

「だよな!? 蒼介」

「あ ああそうだな」

……嘘をつくのは得意ではない

「何を……」

ボソッ

「いいからーらいはが悲しむ！」

ボソッ

「このシスコンめ」

「聞こえてんぞ」

「なんのことだか」

風太郎に對して嘘を着くのは気が樂でいいな
どうせすぐバレるし

「そーなんだ、安心したよー」

風太郎はバレなくてほっとしたようだ。
さていつバレるか見物だな

「これで借金問題も解決だね」

「らいは、お客様の前だぞ」

「言葉は選ぼうな」

まだ小学生だし、そういうところはしようがないか
「あ　ごめん……」

しばらく経つと

「はーい、上杉家特製カレーと卵焼きでーす」

カレーと卵焼きが運ばれてきた

「ありがと、らいはちゃん」

相変わらず美味そうだな、風太郎とは大違ひだ

「ギロツ」

「おつと」

心の中でも気をつけないと

「お口に合うといいんだけど」

合うだろ多分、普通についていかぬっちゃ上手いし

「ふん、お嬢様に庶民の味がわかるかな」

「こら」

ゴンツ

ベシツ

「痛つて！蒼介まですんじゃねえ！」

「そういう嫌味なところ直した方がいいよ」
「妹に同じく」

「らいはと同じ考え方すんな！」

そんなやり取りをやつて いる間 五月は 黙々と 食べ進めていた

11

「今日はご馳走様でした」

「備もありかとおもひました」

旦ぐハヽに往けたが、かなくて語られなか

「俺は大丈夫です、お邪魔しました

俺は止められる前にそそくさとバイト先に向かつた。さて……俺

はまさか次も手伝わされるのかな……

四

家國泰自心田間

1

「なんで俺はまた連れてこられてるんだ」

絶えず眞心を以て人をして居る

「ハハジやねえか。なんち屈きねえか」

「そうだといいが、あまり深くは入らないぞ」

一
ああ

こんなことを語っているとやがて1番最後は一花が隠りでさり

まつてくれた！」

何となくこいつのやりたいことはわかつたな
さて俺は事務仕事でもうながら傍観していくが

「まあ私たちの家ですし

Z Z Z Z Z Z

「また諦めてなかつたんだ」

「友達と遊ぶ予定だったんだけどー？」

……風太郎嫌いなのに結局断つたのかよ

なんだこいつ

「なんであんたまでいるのよ」

「文句なら風太郎に」

「家庭教師はいらぬいって言わなかつたつけ？」

「乃が不満そうな顔で言つた

「だつたらそれを証明してくれ」

ほらな。てかなんでこいつはきつさと気づかなかつたのか……馬鹿だなこいつ

「証明？」

「乃がは？」という顔で言つた

「昨日出来なかつたテストだ」

そういう風太郎は紙を取り出した

「合格ラインを超えたやつには金輪際近づかないと約束しよう」

「「「「！」」」

「勝手に卒業していつてくれ」

あいつが考へてる事はこうだ

バカ正直に5人を相手する必要はない

赤点の候補のやつにだけ教えてやればいいんだ

、そう上手くいくかね

「……なんであたしがそんなめんどーなことしなきや「分かりました、受けましょう」

そりや五月は乗るだろうな、あんだけ勉強してれば合格できるだろうし、五月自身、風太郎の顔も見たくないだろうからな

「は？五月あんた本気？」

「合格すればいいんです。これであなたの顔をみなくてすみます」

「そういうことならりますか」

一花がムクつと立ち上がつた

「みんな！頑張ろ！」

「合格ラインは？」

「60……いや50点あればそれでいい」

「風太郎にしては低い方だぞ」

「お前もやれよ？」

「は？」

二乃がため息をついた

「別に受けた義理はないんだけど」

「あんまり私達を侮らないでね」

……俺も受けるか。確認だから簡単だろう

二〇分律

11

「採点終わったぞ！すげえ100点だ！」
うつそお……まさか

一全員合わせてな！」

五つ子の間にはトミーとした空氣があつた

「ハヤリ久しづりこお前の驚く顔見せてもうつたわ

「笑うな！」

二ノヤ口ウ……後で覚おとによ……

「逃げろ！」

「あ！」

五二子達は2階の部屋へと送りた

待て！

「あはは
なんか前の学校思い出すね」

「厳しいとこだつたもんねー」

「うふ」
「ああ」

「あい？ 知つてんのかな？」

((おやがこいつら……))

「私たちが落第しかけて転校してきたってこと」

(（5人揃つて赤点候補かよ！）

第4話

「……風太郎来るの遅くないか？」

教室で五月にただ同意を求めるだけの質問をした

「そうですね……二乃も遅いです。彼が来ない分にはありがたいのですが」

「本人の親友の前でそんなこと言うのやめよ？」

時計の針は8時25分を回っていた

と、そこに二乃が入ってきた

「全く……はあ……」

「どうしたのですか？二乃」

「上杉がしつこいのよ……今朝も校門前で仲良くなるためか話しかけてきたし……」

「はあはあはあ……ギリギリセーフ……」

そんな会話をしてる時にやつと風太郎が登校してきた

「おっせえよ。こちどらお前しかろくに話すやついないのに。ていうかまたお前勉強で夜更かしでもしたんだろ」

「……しゃーないだろ、こつちは家庭教師としての勉強もしないといけねえんだ」

余程風太郎はこいつらに嫌われてるのかこいつが俺のところに来たらすぐ二乃と五月は自分の席に着いた

二乃とはあの喧嘩？もあるしな

休み時間

＝＝＝

「蒼介、俺は今朝五月以外の五つ子と会ったんだが案の定二乃が、家庭教師なんていらないと言つてきたので、それなら勉強してるんだなと思ひ、この前のテストの問題を出してみたんだ」

「ふむ」

嫌な予感しかしねえな

「なんと、全員わからなかつたんだぞ！」

だが俺はその後見てみたんだ」

「ん? 何をだ?」

「この前のテストのそれぞれが回答できた問題が書いてあるノートをだ」

そして風太郎はそのノートを見せてきた

「何か違和感を覚えないか?」

ちなみに俺が出した問題は問一のやつだ

「……三玖が正解してゐるな」

「だろ! なんであいつ答えなかつたんだ……」

「そんなん知らんわ」

昼休み

食堂

「よ よう三玖

350円のサンドイッチに……なんだその飲み物……」

食堂で風太郎が三玖に話しかけていた

「抹茶ソーダ」

「逆に味が気になるな……」

「意地悪するフーフーとソーススケには飲ませてあげない」「意地悪…… いらないけど」

「やつぱりこいつは何考えてるのかわかんねえ」

「思考読むな!」

やつぱりおもしれえなこいつ

「ひとつ聞いていいか? 今朝の問題の件なんだが……」

「上杉さんと中村さん、お昼一緒に食べませんか!?」

「うおつ」

「四葉か、びっくりしたじゃねえか」

「あははー上杉さん、朝は逃げちやつてすいません~」

「それで三玖「コレ見てください英語の宿題」

「さつきの話 「全部間違えてましたあはははは！」

「ちよつと邪魔だからどいてようねー

「花頼むわ」

「はーい、ごめんねー」

「一花も教えて貰つたら？」

おおつさすが四葉どんどん勧誘しろ

とか思つてるんだろうなあ風太郎

「うーんパスかな

ほら、私たちバカだし、ね？」

「だからつてなあ……」

「バカだから勉強すんじやねえのかかよ……」

さすがに俺も呆れた

「それにさ、高校生活勉強だけつてどうなの？もつと青春をエンジョ

イしようよ」

「恋とか！」

「！」

「恋？あれは学業から最もかけ離れた愚かな行為だ」

「中村さんと上杉さんがシンクロしてる……！」

「したいやつはすればいい……だが、そいつの人生のピークは学生時代となるだろう」

「この拗らせ方……手遅れだわ！」

まあ俺は学業云々の話じゃなくて出来ないけどな

「あはは、恋愛したくても相手がいなんんですけどね」

……まあ俺もそれはあるが

「三玖はどう？好きな男子とかできた？」

「えつ」

？なんであんな驚いてんだ？

「い、いないよ！」

タタタ……

走つて逃げるほど何か、恥ずかしかったのか？

「なんで逃げたんだ？あいつ」

「あの表情、姉妹の私には分かります

三玖は恋をしています

二

「おい？俺たちじやないからな？」
「ばつ、わかってるわ！」

教室

一黒鹿じやねえのか あんな色恋沙汰で騒ぎやが〔て〕

「他」へ事ジやヌ元ハツボウラ前ニモ、

手伝つてもらうぞ

しまうぞ】

まあそれは危ないか
そうそう『たらねえたら』

他、鳳太郎は居る者いなし

「何二やついてるんですか？ 気持ち悪いですよ？」

おつ……そこでその質問はありがたい

さすがだ五月

真頃一 ごのまゝ二 真頃一

ガキの言ひ訳みたゞなつて

約10分後

— 1 —

「は？なんだよその大量の歴史の本」

風太郎が屋上から降りてくるのを見て、どこに行くのかと着いて

行つたら図書室に来た

「話すと長くなるのだが……」

＝＝＝

ふむふむ、つまり三玖に歴史の知識で負けたから次は負けないよう
について話か

とどのつまり三玖は俗に言う歴女らしい、
きつかけは四葉から借りたゲーム

……さつきから俺誰に説明してんだろ
「まあ頑張れ、それしか俺は言えん」

「おう、ありがとな」

たまに素直なのなんなんだよこいつ

翌日、昼休み

＝＝＝

なんかあいつ決戦に行くとか言つてどつか行きやがった、まあ三玖
の件だろうが

……前から四葉が来た

「え？ なんだよその荷物の量」

四葉はダンボール3つを持って一人で歩いてきた

「あはは、先生に頼まれちゃいまして……」

「お前、断るとか、誰かに手伝つてもらうとかしろよ……お人好しがす
ぎるぞ

ほら、貸せ、2個持つてやる」

「いいんですか？、ありがとうございます！」

もう少し頼ればいいのに……

！ヤバつ四葉の手に当たつてしまつた！

ビュオオオオオ!!!

「ああ！私のリボン！」

四葉のリボンが解けて風で飛んでいつてしまつた

「すまん、俺のせいだ」

「え？ なんですか？」

……こいつには話していいか

「俺が今から言うことは誰にも言わないでくれ」

＝＝＝

「へえー！そんな人がいるんですね！」

「凄いです！」

「？怖がらねえのか？」

「なんで怖がるんですか？当たらなければいいだけの話じゃないです
か」

「それはそれで傷つくんだがな、まあいいが」

「え？すいません！」

「いいよ別に、慣れてる」

「悪気はないだろうしな

「わお！上杉さん！ちゃんと前向かないとダメですよ」

「何やつてんだお前」

風太郎が窓越しに走っていた、すると、四葉の顔を見るなり風太郎の顔が青ざめて、後ろを向いてすごいことを言い出した
「四葉、落ち着いて聞いてくれ、

お前のドッペルゲンガーがそこにいる、お前死ぬぞ」

「ええええええええ、死にたくないですー！」

「風太郎何言つてんだ、四葉も真に受けるな」

「だつてほらあつちに」

「？あああれか、リボン付けてるけどあれ

三玖だろ、髪長えし」

え？気づいてねえのこいつら

「なつ!?」

三玖が逃げ出した

「待て三玖ー！」

……本当に何してんだあいつら

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「だから何回言つたらわかるんだ……」

＝

「ライスはLじゃなくてR！」

お前シラミ食うのか！」

「あわわわわ……」

「いいじやねえか、来てくれてるだけマシだ、ということで俺は帰つていいか？」

「ダメです」

「どうしても？」

「ダメです」

「クソが！」

「口悪いですよ！中村さん！」

「？四葉なんでお前怒られてるのにニコニコしてんだ？」

「えへへ、家庭教師の日でもないのに

上杉さんが教えてくれるのが嬉しくて」

あらヤダ素直

「はあ、ほかの4人もこれくらい素直だつたらいいんだがな」

「あはは、一応声はかけたんですけどね」

「かけたのにこないとはあいつら……」

「あ！でも残りの4人じゃなくて3人ですよ？」

「？」

「どういうことだ？」

「ね？三玖」

「え？なんでいるんだ？お前昨日何したんだよ」

「来てくれたのか！」

「……なんで通り過ぎたんだ？」

本の貸出履歴を見て……

「フータローのせいを考えちゃつた

ほんのちょっとだけ、私にもできるんじやないかって

「だから、【責任、取つてよね】」

「ああ！任せろ！」

「？本当に何があつたんだ？」

不幸発動!?

「ドンッ！」

風太郎は、ガラス扉にぶつかっていた

「なんだこれ！、センサー反応しろ！」

「5人だけでなく、お前も俺の邪魔をするのか！」

馬鹿だろこいつ、面白いから見てよ

「！、あのー、30階の中野さんの家庭教師をしている上杉と申します。

そこのドア壊れますよ？」

「ククククク……」

こいつ監視カメラに語りかけてやがる

そろそろ言つてやるか

「何やつて」「んだよ」「るの？」

「うおつ、びつくりした、三玖か」

「おはよう、蒼介、フータロー」

「つていうか2人とも、今時オートロックも知らないんだ」

「いや俺は知ってるんだが」

「知つてるなら言えよ！」

「いや、面白くて」

「お前、この野郎……」

「2人とも、何してるの？」

家庭教師、するんでしょ？」

エレベーター内

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「ていうか勝手にそういう流れになつてるが、なんで俺までしないと行けないんだ

俺も暇じやねえし、あぶねえだろ」

「いいじやねえか、暇じやないつてもバイトだろ？、そうそうあたりもしねえし」

まあいいか

「？何が危ないの？」

「……いや、なんでもない」

「？」

中野家

— = = = = —

「おはようございまーす！」

四葉の大きい声が響いた

「準備万端です！」

「私もまあ見てよっかな」

「私はここで自習してるだけなので勘違いしないでください」

「約束通り、日本史教えてね」

えらく従順だな、まあこいつらも人間か

「よーしやるか！」

このまま順調に行けばいいんだが、と思つた矢先

「あ、なーに？また懲りずに来たの？」

「三乃」

強敵出てきたな

「先週みたいに途中で寝てしまわなきゃいいけど」

「は？よく昨日の今日でそんなこと言え r 「どうだい？二乃も一緒に」

耳打ち

「落ち着け、ここは優しく接しないと」

「それもそうだな

「死んでもお断り」

(イラツ)

「……まあ4人でいいだろ」

「……ニヤツ

あ！そうだ四葉、バスケ部の知り合いが大会の臨時メンバー探して
るらしいんだけど

あんた運動出来るし、今から行つてあげたら？」

「いつ、今から!?」

「でも……」

「なんでも、5人しかいない部員のひとりが骨折しちゃつたらしくて、このままだと、大会に出られないらしいのよ

頑張つて練習してきただろうに

あー、可哀想」

「そんなの行くわけ……」

「上杉さん！すみません！困つてる人を放つておけません！」

「嘘だろ、」

「あの子断れない性格だから」

と、こういつた調子で、三玖以外が出ていってしまった、まあ俺は五月に連れられて図書館に来た訳だが

「大丈夫かあいつ」

「知りません、そんなことよりここの問題教えてください」「ああそこは……」

夕方

—＝＝＝＝

「じゃあ俺帰るわ、じゃあな」

「ありがとうございました、中村君」

「いや待つて、財布忘れた」

「え!? 何してるんですか」

「すまん、一旦中野家寄つてから行くから、先いくわ」「わかりました」

PENTAGON（中野家のあるマンション）入口

—＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「あ、財布忘れた、ん？ 蒼介？」

お前は五月の方行つたはずじゃ

「財布忘れた」

「お前もかよ」

ピツポツパツボツ

「忘れ物？ シャワー浴びてるから勝手に入つていいよ」

「おいそれでいいのか三玖」

中野家

— = = = —

「お邪魔するぞー」

ぶおおおお！

「なつ、三玖！もうでてたのか！」

「まで、こいつ二乃だ」

「は？嘘だろ」

「誰？三玖？お風呂入るんじやなかつた？
空いたわよ？」

「まじか……」

「さつさととつて……」

もう逃げやがつたあいつ

俺もさつさととつて出よう

「いつもの棚にコンタクトあるから取ってくれない？」

目が悪いから見えてないのか、ありがたい
だが、こんな不誠実、バレたら終わりだ

「お昼にいじわるしたこと、まだ根に持つてんの？
ど二だ！」

「あれは勢いで……悪いとは思つてるわよ」

早く……！

「何してんの？そこじやないって
！」

「場所変えてないわよ」

んぎやあああああ、胸が……！

ダダダダダ、今は逃げるしか……

「パパに命令されたからつて勝手に家に入つて……私たち5人の家に
あいつが入るところなんて、ないんだから」

こいつ……まさか……

「決めた！フータローと、ついでにソーススケも今後一切出入り禁止！」

すまん、出るのは許してくれ

バンツ

「いつた……」

二乃が、棚に手をぶつけた、……ヤバつ忘れてた、不幸が、来る！

「危なつ！」

「！」

バタバタバタ、本が上から落ちてきて、それから守ろうとして、二乃に覆いかぶさつてしまつた

「えつ！」

この時の俺はまだ理解していなかつた
この馬鹿5人組の一人一人と向き合うことの難しさを
そして、俺も教わることとなる

俺もまた、馬鹿野郎だということを！

「不法侵入ーー！」

「違う！俺は取りに来ただけだ！」

「撮るつて何を！」

カシヤ

「あつ」

「中村君、何をしているのですか？」

事件

なんでこんなことになつた……！

中野家リビング

—＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「一体何をしてるんですか！中村君！」

裁判長！見てくださいこれを！」

と言つて五月は、一花に写真を見せた

それは俺が二乃を押し倒してるように見える写真だつた

「待てつて！俺はただ本が「裁判長」

と二乃が手を挙げ、裁判長（一花を呼んだ）

「この男は、一度マンションから出たと見せかけて、私のお風呂上がりを待つっていました

悪質極まりない犯行に我々はこいつと上杉の今後の出入り禁止を要求します」

スラスラいいやがつて……

「だから話聞けよ！俺は本が二乃に落ちてきそうだつたから覆いかぶさつて守つただけだ！」

「てかなんで俺まで巻き込まれてんだよ！」

「逃げた罰だこの野郎」

「にしては気づくのが早かつたわよ！」

それについてはどう説明する気よ！

そんな前から気づけるわけないわ！」

「それは……」「

（どうすんだよ、言つていいのか？）

（言うしかねえだろこんな事になつてるんだから。少なくともお前は守られる）

（でもそれじゃお前が）

（大丈夫だよ、てか俺やりたくないなかつたし）

「四葉には言つたが、俺には信じられないかも知れないがとある体質がある」

「なんにしろあなたの言葉は信じないわよ！」

「まあ聞けよ、俺の体質とは、【俺に触れた人は不幸が起きる】つていう体質だ

「なんでかつて言われてもわからん」

「はあ!? 何よそれ、嘘つくならもつとまともな嘘を「それは私も聞きましたー！ 荷物運んでるの手伝つてもらつてる時に！」

「俺もその体質は知つている」

「そんな体質あるわけないじやない！」

「嘘よ嘘！ 苦し紛れのしようもない嘘よ！」

「第1、そんなのがあるんだつたら上杉といつも一緒にいるんだから

あんたも不幸くらつてるはずでしょ！」

「ところが、何故か俺は不幸受けないんだ」

「なんでよ！」

「知らねえよそんなことなんなら試してみるか？ 嘘だと思うなら」

「それは……」

「ほらな？ ビビるくらいなる信じてくれよ」

「……そうですね、そういうことなら……」

「なーんだ、てつきり性欲を押されなくなつたのかと」

「気をつけてくださいね！ 中村さん！」

「ちつちよつと！ 何解決した感じだしてるのでよ！ 適当なこと言わないで！」

「三乃、しつこい」

「……!! ……あんたねえ」

「まあ、そうカツカしないで、私たち昔は仲良し5人姉妹だつたじやん」

「……つ」

「いや、すまんそもそも俺が触つてしまつたのが悪い、俺がいても意味ないしあとは風太郎に任せると」

「昔はつて……私は……」

「ダツ、タタタ、ガチャツ、バタン

「おかげで助かつたがあいつ出でいつたがいいのか？ てか蒼介、勝手

に任せるとか言うな

お前がいないと困る」

「知らねえよ、俺はもう行かない、これは決定事項」

「はあ、は、そろそろ帰るか蒼介

話は帰ってる時にでも」

「そうだな」

エレベータ内

—＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

あいつらこれでいいんだろうか、まあ人の家に過度な干渉もダメだ

ろう

「で、結局……あ」

「！」

「あ」

タタタツ……ガクツ

風太郎と俺が出てきてオートロックが開いた隙に入るつもりだつたんだろうな

「ちつ、使えないわね」

えー……

「なるほど、鍵も持たずに出てきたのか

だからといつて中の3人に開けてもらうのも

バツが悪いと」

二乃に聞こえないように風太郎が言つてきた

「何見てんのよ、あんたの顔なんてもう見たくもないわ」
手助けしたら余計怒りそうだな、やめとこう

……

「先行つてろ風太郎」

「！、おう」

「はあ……」

ダダダダ

「！」

ザツ

「は？何してんの？」

「バイトの事務仕事がまだ終わってなくてな
、家に帰つてからじややる気が出らん」

「あつそ、あんたバイトやつてたのね」

「そうだ、お前の家より数倍貧しいよこつちは」

「何？嫌味？」

「嫌味もクソも事実だろ」

「うるさい、みんなバカばっかりで嫌いよ」

「姉妹のこととか？それは嘘だろ」

「…！、嘘じやない！」

「あんた達みたいな得体の知れない男を招き入れるなんてどうかして
るわ」

「私達の…」「5人の家にあいつの入る余地なんてない」

「！」

「そう言つたな、確か

「俺が嫌いってだけじゃ説明つかねえんだよ」

「もういい、黙つて」

「むしろ逆だろ、姉妹のことが嫌い？」

「5人の姉妹のことが大好きなんじやないのか」

「だから異分子の俺たちが気に入らないんだろ？違うか？」

「…違うわ、見当違いも甚だしいわ、人のことわかつた気になっちゃつ
てそんなのありえないわ、キモ」

「えらく隠すな」

「…何よ、悪い？」

「俺の妹では無いが風太郎に妹がいてな、その気持ちわか「そうよ！私
悪くないよね？」

「は？」

「バカみたい、なんで私が落ち込まなきや行けないの？」

「おいおい、…」

「やっぱ決めた、私はあんたを認めない

例え、それでの子達に嫌われようとも

「…勝手にしろ、ただ風太郎は認めてやると助かる、「あんた達」じゃないんだろう？」

「あつ、間違えた、あんた達よ！」

オートロックのドアが開いた

「三乃、いつまでそこにいるの、早くおいで」

「！三玖、」

「あつ、ソースケもいたんだ、ちょうど良かつたフータローに「三玖！」

「帰るわよ！」

「でもまだ話が」

「いいから！」

とりあえずこれで俺は辞められるか…
何を言うつもりだつたんだろうな三玖
まあこれからはバイトに専念しよう

日曜日

— = = = = = = = = = = —

ラジオ

「今日は東町で花火大会がありますね」

そうか、今日は花火大会か…仕事あるだろうし、行つてみるか、知り合いもいるだろう

「…あいつらはやめて欲しいな…」

とりあえず日中はバイトするか
ブロロロロロロロロロ…

ケーキ屋

— = = = = = —

「いらっしゃいま…なんだ君か」

「なんだつてなんですか店長

そういえば今日は風太郎は？」

「上杉君は今日は休んでるよ

なんか、五つ子に奪われた時間を取り戻すとかなんとか

「あー…なるほど、そういう事か」

「とりあえずそろそろ店開くから着替えてきて

「ういっす、」

勤務後

「店長、そういうえば今日花火大会あるんですよね？」

「ああ、あるよ、それがどうしたんだい？」

「店長の知り合いに助つ人探してる人いないかなーって…」

「はあ、わかつたよ、聞いとくよ、6時までには連絡しておく

「うつし、ありがとうございます！店長

それじゃお疲れ様でした

「お疲れ様…さてと、連絡した時に、後で自由にしてやつてって言つて
おくか」

帰宅後

「ん？メール？誰だ、珍しい

ああ、五月か、なんの用だろう」

中村君、今日は花火大会があるようです
一緒に行きませんか？

なるほど、でも無理だな俺は
「仕事が入つてる…つと
一旦風呂はいつて休憩するか…」